

賀露港（鳥取港）の「みなと文化」

岡 村 吉 彦

目 次

| | |
|--|-------|
| 第1章 賀露港の整備と利用の沿革..... | 69-1 |
| 1. 古代・中世 | 69-1 |
| 2. 近世 | 69-1 |
| 3. 近代 | 69-2 |
| 4. 現代 | 69-4 |
| 第2章 「みなと文化」の要素別概要..... | 69-5 |
| 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」.... | 69-5 |
| (1) 伝説 | 69-5 |
| (2) 芸能 | 69-5 |
| (3) 方言 | 69-6 |
| (4) 歌謡 | 69-6 |
| (5) 信仰 | 69-7 |
| 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」..... | 69-8 |
| (1) 賀露明神の宮銭..... | 69-8 |
| 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」.. | 69-8 |
| (1) 造船業 | 69-8 |
| (2) 海産物加工業－イタヤ貝－..... | 69-8 |
| (3) 地引き網漁（タイ網）..... | 69-9 |
| 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」..... | 69-9 |
| (1) ホーエンヤ祭（鳥取県指定無形民俗文化財）..... | 69-9 |
| (2) 北海道移住者による神社への奉納..... | 69-10 |
| 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」.. | 69-10 |
| (1) 空間構成 | 69-10 |
| (2) 人的構成－名字－..... | 69-11 |
| 第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き..... | 69-12 |
| (1) 吉備真備杯奉納囲碁大会..... | 69-12 |
| 参考文献 | 69-13 |

所在地：鳥取県鳥取市

港の種類：港湾

港格：重要港湾



【位置図】



【現況写真】(鳥取県港湾空港課)

第1章 賀露港の整備と利用の沿革

1. 古代・中世

賀露は鳥取平野の中央部を南北に流れる千代川と、湖山池から流れ出る湖山川が合流し、日本海に注ぐ河口に位置する港町である。往古は「かる」「軽」「軽の浦」とも呼ばれ、因幡国における水上交通・流通の要衝であった。

賀露の歴史は古く、六国史の一つである『日本三代実録』によれば、河口の丘陵に鎮座する賀露神社は元慶2年(878)に「従四位上」の神階を授与されている。このことから、遅くとも9世紀には同神社を信仰する人々が当地域に居住していたと推察される。

また、『因幡堂薬師縁起絵巻』によれば、長徳3年(997)に「賀留」の沖で薬師如来像が地元の人々によって引き上げられたとある。また、平時範の日記である「時範記」によれば、承徳3年(1099)に因幡国司として赴任した平時範が、一宮である宇倍社や三嶋社・服部社などとともに「賀呂社」にも巡拝している(「時範記」)。

中世には湖山池に面した布施の地に因幡守護所が置かれたが、この地域は「舟入」という地名のほか、近江の堅田商人がこの地に來住していたという記録も残っており、因幡地方の経済拠点でもあったと思われる。日本海沿岸各地からの物資は千代川・湖山川を経て湖山池や因幡国内各所へ運ばれ、海・川・陸の交通・流通の結節点に位置する賀露の重要性は一層高まったと推察される。

天正9年(1581)3月には、鳥取城の城番として赴任した石見国福光城主の吉川経家が「加路」に上陸し、因幡国人たちの案内で鳥取城へ入城している。同年7月には、羽柴秀吉が経家の立て籠もる鳥取城を数万の軍勢で厳重に包囲し「兵糧攻め」を展開したが、このとき賀露浦も秀吉軍によって押さえられている。毛利軍は日本海を通じて鳥取城へ兵糧を運び込もうとしたが、賀露の沖合に停泊していた秀吉方の船団により阻止されている(「山縣家文書」)。

2. 近世

賀露が因幡国の主要港としての機能を持ち始めたのは近世初頭であったと思われる。吉

川経家とともに鳥取城に籠城した山縣長茂が寛永 21 年（1644）に記した覚書（『吉川家文書』）には、「西口は仙大川（千代川）有り、（中略）、此大河かる（賀露）の湊へ落合、因幡国中舟入之事」とある。このことから、17 世紀初頭には、賀露が因幡随一の「湊」であったことは間違いない。

慶長 5 年（1600）関ヶ原合戦の後に因幡 4 郡を与えられて鳥取城へ赴いた池田長吉は、鳥取城の整備のために千代川河口の賀露の湊を必要とした。これに対し、賀露の湊を含む高草郡を領有していた鹿野城主亀井茲矩は池田長吉の所有する八上郡袋河原の地を望んでいたことから、両者の間で交換が成立し、賀露湊は池田長吉領となったと伝える（「因幡民談記」）。

江戸時代の賀露は因州藩の外港として重視され、「船手番所」が置かれた。この番所には徒士 1 名、下番・水主 2 名が配置され、因幡国内に入港する船の乗組員や出入りする物資を監視した。明暦 3 年（1657）には因幡からの出港者の吟味や異国船監視が加えられたほか、貞享 5 年（1688）には番所前での魚釣や無用者が船を着岸することも禁じており、人・物資の取り締まりはかなり厳しいものがあった。

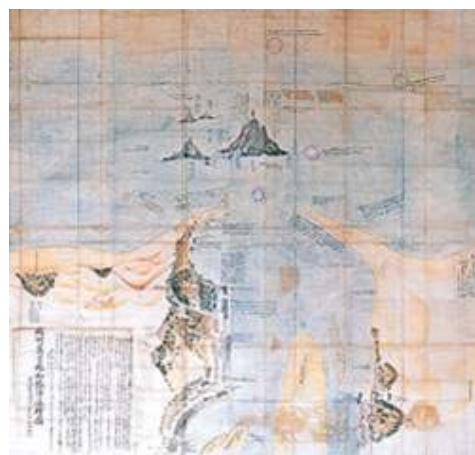
1660 年代に作成されたとされる倉田八幡宮蔵「寛文大図」によれば、千代川の沖合に鳥ヶ島と宮島が浮かび、賀露明神（現賀露神社）の下に番所が、湖山川と千代川の合流地点には御茶屋が描かれている。東善寺のあたりから賀露明神下にかけて御茶屋を囲むような形で多数の集落が広がっているほか、日本海に面した沿岸部にも漁師と思われる数軒の家が並んでいる。賀露神社が所蔵する「賀露湊絵図」にもほぼ同様の構図がみられる。

江戸時代の当港に出入りする船の出航地をみると、居組（兵庫）・浜村・青谷など近郊が多い。おそらく中小型船が中心であったと思われる。これは諸寄（兵庫）や美保関（島根）がいわゆる「北前船」のような大型廻船の寄港に適した地形を持つものに対して、因幡の港は東側に広がる鳥取砂丘の延長上にあり、また千代川が運ぶ土砂の影響もあって川底が浅かったためと思われる。明和 8 年（1771）には港の付替工事が始められたが失敗に終わっている。

幕末期になると、国防の必要上、幕府は諸大名に海岸警備を厳重にするよう命じ、因幡国内にも浦富・浜坂・賀露の地に台場が築かれた。賀露の台場は文久 3 年（1863）頃建設されたと言われ、字「湊の三」の地続きにあったことから湊の三砲台と呼ばれた。

3. 近代

千代川は因幡地方の水上交通・流通の大動脈ともいえる重要河川であったが、同時に流域の人々の生活を脅かす氾濫川でもあった。寛政 8 年（1796）成立の『五水記』によれば、文禄 2 年（1593）以降、少なくとも 5 度の大水害があったことが記されている。



【江戸時代の賀露湊絵図（賀露神社蔵）】
（砂地が広がる河口と左手に御番所が描かれている。沖合に浮かぶのは吉備真備公が漂着したとされる鳥ヶ島。）

その主な原因の一つは、河口に位置する賀露港の狭小な構造にあった。明治時代に入り、事態を重くみた鳥取県は指導助言者として、G・A・エッシャー、デ・レイケという 2 人のオランダ人工師を招聘し、賀露港の修築に乗り出した。彼らは、明治 9 年（1876）と同 21 年（1888）にそれぞれ鳥取県を訪れ、賀露港や千代川河口流域を視察している。

彼らの指導助言を受けて、明治 22 年（1889）5 月、服部長七を担当者として賀露港の改修工事が開始された。このときの工事は主として河口左岸から賀露港の沖合に位置する鳥ヶ島まで、波止となる突堤を築造するというものであった。突堤を築造するための石は千代川下流東岸に位置する荒神山より切り出し、土砂と混ぜる石灰は千代川上流に位置する八頭郡八頭町の新興寺から運んでいる。

また、明治 17～18 年（1884～85）には、政府の開拓移住政策を受け、それぞれ 100 戸の旧士族と 5 戸の師範農が、当時未開の荒野であった北海道の釧路と岩見沢へ移住した。このときの移住者たちは賀露の東善寺に集合し、賀露港から船で北海道へ渡っている。また当時宗谷沖のオホーツク海ではニシン漁が隆盛を極めており、賀露をはじめ鳥取県沿岸部からも漁民が出稼ぎに出かけた。彼らの中には稚内や利尻島へ定住する人々も多かった。

大正から昭和の初め頃にかけては松葉カニ漁のほか、50 年に 1 度といわれるイタヤ貝（帆立貝の一種）の豊漁に恵まれた。貝の身は天日干しをして、京阪神ほか中国へも輸出された。

このような動きの中、商港および遠洋漁業の基地としての賀露港の役割は一層重視されていった。その一方で、度重なる大洪水は依然として人々の生活を脅かした。そのため賀露港については大規模な修築が必要とされ、大正 12 年（1923）には再び河口の改修計画が策定されている。しかし、このときの工事は一部着工されたものの、戦争の影響で中断を余儀なくされた。本格的に港が整備されるのは戦後になってからである。



【賀露大橋の脇にある「釧路開拓移民団出港地」記念碑】

（明治 17・18 年、多くの士族が釧路・岩見沢へ移住していった。）



【昭和初期頃の賀露の様子】（神社下にイトバがあった。）

4. 現代

終戦後、社会復興の中で、賀露港も新たな時代を迎えた。昭和 28 年（1953）に地方港湾鳥取港として指定され、漁船を対象に防波堤や物揚場等の港湾施設の準備が始まった。

昭和 50 年（1975）には重要港湾指定を受け、河口を東側に約 800m 移動させ、港湾と河口と分離する工事に本格的に着手する。河口付け替え工事は昭和 58 年に完成し、平成 2 年（1990）には、新たに 1 万トン岸壁を有する鳥取港千代地区が完成し、物流の拠点としての機能の充実が図られた。昭和 62 年（1987）には賀露大橋が付け替えられたほか、港の西側に位置する西浜地区の整備も進み、賀露港は鳥取市北部の経済活動の中心地となっていった。

平成に入ると、賀露港周辺は鳥取県東部の重要経済拠点として一層重視され、平成 10 年（1998）には賀露漁業協同組合の建物が西浜地区に移転し、平成 14 年（2002）には海鮮市場「かろいち」が、平成 15 年（2003）には、カニを中心にさまざまな水生生物を展示・紹介する「とっとり賀露かっこ館」がオープンした。現在も連日多くの観光客でにぎわっている。

さらに近年には近郊地に大型ショッピングセンターが進出し、鳥取市の経済・流通・観光の一大拠点として山陰東部地域の経済振興の一翼を担っている。また平成 16 年（2004）には賀露みなど観光協会が設立され、地域の活性化を図ろうとさまざまな取り組みが行われている。



【現在の賀露港】（中央後方に島がみえる。）

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

（1）伝説

①吉備真備伝説

聖武天皇の天平勝宝6年（754）、当時の遣唐副使吉備真備は、唐から帰国の折、九州沖で風波の難に遭って漂流し、賀露沖の「宮島」に漂着した。その後、「宮島」から約30m離れた「大島」に飛び上がって避難したので、その島を「飛び上がり島」と呼んだという。現在の「鳥ヶ島」である。

その後、真備公は住民の手によって島から陸地に「奉曳（ほうえい）」された。現在の賀露神社の「ホーエンヤ祭」はこの故事に因んでいる。また、上陸直後に海水で汚れた着物を木製の箱に納めて埋めたと伝えられ、その地を「米倉（よなぐら）」または「脱衣塚（えなづか）」と呼び、現在も地名が残っている。

また、真備公は入唐帰朝の記念に野馬台（やまたい）の漢詩を一石一字に書いて賀露の地に埋めたとされる。その石が時折、賀露の海底から発見されるという。

吉備真備公は経文・唐礼等の学問書をはじめ、囲碁・楽器・測量術等を日本に持ち帰ったとされる。真備公の薨去後、宝亀8年（777）に賀露の人々はその神霊を賀露神社の御祭神としてお祀りしたと伝えられている。現在も学問の神様として人々のあつい信仰を集めている。

②因幡堂薬師伝説

東京国立博物館蔵の『因幡堂薬師縁起絵巻』には、長徳3年（997）、因幡国司であった橘行平が地元の漁師に命じて「賀留津」の海中から薬師如来を拾い上げたという記述が記されている。その後、この薬師如来は橘行平を追って京へ飛来したため、行平が自邸を仏堂に改めて安置したところ、その靈験によって行平は因幡守に任じられたといわれている。なお、『一遍上人絵伝』にも京都の因幡堂へ止宿した一遍が、ここの本尊が賀露の海に頭れたことを見聞したと見える。

（2）芸能

①相撲

厳しい自然と共存する漁師町には、自然とたくましさ溢れる気風が育まれていった。そのような気風がもたらしたものに相撲がある。江戸時代、因幡国内各地では勸進相撲が盛んであった。その風潮は戦前まで続いており、現在も因幡国内各地に力士を祀る力士塚が建てられている。賀露においても東善寺付近を中心に17基の力士塚がみられ、山野井鷲之助、大和川徳五郎、響灘作五郎などの名が刻まれている。

その名残は戦後までみられ、賀露では地元の青年力士による相撲行事が賀露神社の秋の祭礼日に合わせる形で行われていたという。現在は地元小学生による少年相撲大会や生後1歳前後の赤ちゃんが参加する「泣き相撲大会」という形で古い民俗行事の伝統を受け継いでいる。



【見物客であふれる賀露神社の相撲大会の様子】
（昭和初め頃）



【早く泣いた方が勝ちという赤ちゃん泣き相撲】
（平成 15 年頃）

（3）方言

賀露には先述した「オセ」以外にも、漁師独特の方言がみられる。種のことを「サネ」と呼んだり、驚嘆に近いニュアンスで用いる「ヤーサーシャー（ナ）」などは、いまでもしばしば年配の漁師の間で使われる。また、近年はあまり使われることはないが、賀露貝殻節の歌詞の中にある「カワイヤノー」にみられるような「ノ」で終わる言い回し（例えば「イキッサーノ（行きなさい）」「見にイカーノ（行こう）」「モチッサーノ（持ってくれ）」など）は、港町の漁師が等輩どうしで用いる言い方であるといわれている。

（4）歌謡

①船曳き歌（舟曳歌）

♪ホーランエー、エー

因幡賀露浦ヤーアンエ、アラ、ヤッテゴセー、ヨーイトナー

因幡賀露浦、出船入船御繁昌ノ港ダ。ヨーイトナー、ホーラララ、デモ、

アララリヤ、ドッコイセ、コララリヤ、ドッコイショ

ヨーイトコヨーイトコ、ナー

ドートセ、ドートセ、ウエー

これは、『ふるさとの民謡』（松本穰葉子、昭和 43 年）に収録された「船曳き唄」である。荷物を積んだ船の入港が困難になったときに、船を引き入れる作業の際に歌われた唄であるという。北海道松前の「罾網起こし木遣り」もほぼ同様の節であり、北海道と日本海の沿岸部とのつながりが想起される。

賀露神社のホーエンヤ祭りでは、千石船の五分の一の模型 2 隻を曳いて町内を回る行列があり、小学 1~2 年生がそれを担っている。かつてはこの船を陸で曳くときにかけ声として、この船曳き歌を歌ったという。

②貝殻節

大正末期から昭和の初めにかけて、因幡地方ではイタヤ貝の豊漁に恵まれた。このときは、長尾岬あたりを中心に、東は岩美郡から西は淀江地方まで、日本海沿岸数 10km にわたり、イタヤ貝が海底一面に大発生したという。豊漁の華やかさとは裏腹に、来る日も来る日も底曳きする作業はかなりつらい重労働であった。貝殻節は、この貝の採取にあたっ

た漁夫たちが、舟曳唄として艫にあわせて歌った唄である。

この貝殻節は、現在も賀露・浜村・青谷・泊・橋津など日本海沿岸部の各地で歌われており、歌詞やメロディーも若干異なっている。最も代表的なものは浜村の貝殻節であるが、これはかつてブリ網（タイ網）漁の舟唄として歌われていたものを、昭和7年（1932）に浜村駅前で雑貨商をしていた上田平十郎が、当時野口雨情に師事していた松本穰葉子に相談し、作曲家の三上留吉らと計画を進め、翌年に「新民謡浜村音頭貝殻節」としてレコード化したものとされる。その後、昭和27年（1952）の朝日放送全国民謡大会で第1位となったのをきっかけに、浜村の貝殻節が全国的に知られるようになった。

しかし、その元唄については諸説がある。一説によれば、賀露の唄は貝殻節と呼ばず、かつては「ホーエンヤ節」と呼んでおり、貝の採取の時に漁師自ら口ずさんでいたという。もともとこの歌が重労働のときに歌われた労働歌・作業歌としての性格を強く帯びていたことを考えるならば、歌詞・メロディともに最も力強さを残している賀露の貝殻節こそが元唄であるとする説もある。

（5）信仰

①賀露神社

約1300年の起源を持つ神社であり、大山祇命・猿田彦命・木花咲耶姫命・吉備真備・武甕槌命の五神を祀る。大山祇命という農業神を祀るのは、もともと賀露一帯が砂浜であり、樹木や農作物があまり生育しなかったため、千代川下流域5ヵ村の総鎮守として祀ったのが始まりとされている。先述したように、平安時代には国司の参詣を受け、江戸時代には藩主により社殿・社地の寄進が多くみられた。

境内にある直径1m40cmを越える大太鼓は、もともと八東町妻鹿野の山中で採れた大ケヤキをくり抜いて製作した三太鼓のうちの一つである。江戸時代末期の安政5年（1858）に鳥取城へ献上され、その後明治初期に払い下げを受けて、美保神社（島根県）、名和神社（鳥取県）、賀露神社の3神社へ奉納された。また社殿内には第12代鳥取藩主池田慶徳公の自筆と思われる社名額が掛かっている。

例祭日はかつては4月11日だったが、現在は4月29日に行う。2年に1度の大祭は「ホーエンヤ祭」ともいわれ、鳥取県無形民俗文化財に指定されている。神輿・神官・神具等を乗せた台船が千代川を下る「海上渡御」の行事がみられるところに特徴がある。漁民の信仰があつく、賀露港を出漁する船は湾内で神社の方を向き、両手を合わせて豊漁・海上安全を祈願してから沖へ向かうという風習が残っている。



【1300年の歴史を持つ賀露神社】

②船玉神社

賀露神社の末社として神社境内地に鎮座する。明治7年（1874）の棟札によると、鳥取城下の袋川沿い、鑄物師橋と鹿野橋の間にあった「御船宮」を明治7年8月に賀露神社末社として勧請するとある。

漁師の信仰があつく、船持衆・漁師による屋根葺替等の棟札が多く残っている。例祭日は3月7日。



【賀露神社境内地に鎮座する船玉神社】

2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

（1）賀露明神の宮銭

因幡国内では古くから大谷・陸上・寺山・内野・伏野・姉泊・園といった沿岸部で塩の生産が行われていたようであり、これらの産地から塩が千代川へ運ばれる際、賀露の港で運上銀が徴収されていた。その後、因幡各地での塩生産量が低下してからは、下松・三田尻（現在の山口県）からも塩が因幡へ運ばれるようになり、それは「下松塩」「三田尻塩」などと呼ばれた。

賀露神社に残された近世文書によれば、18世紀中頃から、賀露の港に出入りする船に対し、塩の運上銀の中から賀露明神に対する上納銭（宮銭）が徴収されていたことが知られる。安永5年（1776）の記録によれば、宝暦3年（1753）2月から「賀露明神江宮銭」として、塩10俵につき3文が「宮銭」として賀露神社に奉納されていたとある。この宮銭は塩1俵につき約3毛となるので「三毛銭」と呼ばれていた。

宮銭の対象となったのは塩だけではなかった。「賀露干鰯三厘銭取立帳」（賀露神社蔵）によれば、天保2年（1831）から弘化3年（1846）にかけて、港で取引される干鰯の総量に対して3厘の宮銭が徴収され、上納されていたという記録がみられる。これは塩の「三毛銭」に対して「三厘銭」と呼ばれた。これらの宮銭は主に賀露神社や末社・宝蔵の修繕に用いられていたという。「三毛銭」「三厘銭」という港の流通市場における税収入が江戸時代の神社経済に大きく関わっていたことが知られる。

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

（1）造船業

港湾である賀露では造船業の発達もみられた。大正7～8年頃には、石黒・加納・諸山・川口・敦賀など造船業を営む家は何軒もあった。いずれも15～25トン程度の底引船であったという。昭和30年代ころまでは湖山川河口に造船所が何軒も建ち並び、木造船を建造していた。

また、船大工も多く、地元の語り部によれば、石黒・石松・大江といった船大工の名が知られる。石船を造る家もあったという。

（2）海産物加工業－イタヤ貝－

山陰海岸一帯は良港に恵まれ、沖合遠洋漁業から地引き網までさまざまな漁法によって

豊富な海産物が水揚げされた。このうち、近代において、賀露の町の景観や人々の生活に大きな影響を与えたと思われるものは、「イタヤ貝」の収穫・加工である。イタヤ貝は帆立貝の一種であり、同種中最も小型であるが最も美味であるとされた。

特に貝柱は珍重され、あちこちの小屋で身剥きの作業がみられた。大きな加工場というものではなく、ほとんどが家内工業であった。子どもたちも黒い筋を取る作業を手伝ったりした。貝柱は中華料理の食材として珍重され、天日干しをして、国内だけでなく上海や香港へも輸出されていた。

（３）地引き網漁（タイ網）

千代川の河口は砂地が多く、地引き網漁（タイ網漁）が盛んであった。当時、この地域には「網師屋」と呼ばれる家が 5～6 軒あり、千代川を挟んだ東西の浜でタイ網漁を行っていた。2,000m ほど離れた沖合より魚を追い込み、地元住民も協力して総勢 100～120 人で 1 つの網を引っ張った。昭和 60 年頃までタイ網漁の光景がみられたが、現在はほとんど行われていない。

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

（１）ホーエンヤ祭（鳥取県指定無形民俗文化財）

賀露港の丘陵に鎮座する賀露神社では毎年 4 月 29 日に例大祭が行われる。2 年に一度、神輿や幟武者・奴の行列が町内を練り歩く「ホーエンヤ祭」と呼ばれる御幸祭が執行される。これは神輿や神具が箱船の台船に乗って千代川を下る「御船下りの神事」がみられるところに特徴がある。

「ホーエンヤ」とは「奉曳（ほうえい）」の意味であり、かつて賀露の漁民たちが、鳥ヶ島へ漂着した吉備真備公を賀露の港まで奉曳したという故事に因むものである。

祭礼日の 4～5 日前の吉日、氏子の中から選ばれた 19～20 歳の若者による「もみ火の神事」が行われる。これはウツギの枝を両手で回転させ檜の板の臼にもみ込んで火をおこすもので、西日本では賀露神社のみにみられる珍しい神事である。このようにしておこされた火は「御神火」として、神前に供える餅つきのカマドの火や御神燈の種火として使用される。

例大祭の当日は、40 人担ぎと言われる大神輿のほか、小学生による大名行列・子ども神輿、中学生による榊・鉾、高校生による武者行列、そして 20 歳前後の若者による麒麟獅子などによって構



【西日本唯一の「もみ火の神事」】

（ウツギの棒を檜の板にもみ込んで火をおこす。早ければ 15 分、遅いときは 2 時間以上もかかるという。）



【鳥取県指定無形民俗文化財の賀露神社ホーエンヤ祭(4月29日)】(神輿を乗せて千代川を下る箱船とその周りを航行する伝馬船)

成された御幸行列が、箱形の台船に乗り込み、千代川を鳥ヶ島付近まで下った後、上陸してさらに町内を一周する。海上では化粧を施したニワカと呼ばれる男たちが乗った伝馬船が、「ホーエンヤ、ホーエヤエーエ」というかけ声を掛けながら、千代川を下る箱船の周囲を漕ぎ回る。年齢に応じて諸役が決められており、地域における通過儀礼の意味合いを色濃く残していることから、平成 20 年（2008）4 月に鳥取県無形民俗文化財に指定された。小学生から高齢者まで老弱男女が参加し、1 年間のうち町内が最もにぎわいをみせる伝統行事であり、県内外からの観光客も多い。

（2）北海道移住者による神社への奉納

明治 10～20 年代、北のオホーツク海ではニシン漁が最盛期を迎え、多くの出稼ぎ漁民でにぎわった。賀露からも多くの漁民が北海道に渡っている。

このうち、利尻島の利尻富士町鴛泊にある利尻山神社には、明治 30 年（1897）5 月に鳥取市気多郡賀露村の住民たちが奉納した石灯籠が残されている。石灯籠は神社入り口に立っており、寄進者として竹田与三郎・沢山文四郎・小林長太郎・沢山久太郎・山辺久造・岸本常右衛門の名が記されている。

また、彼らの中には宗谷地方や利尻島に定住し、ニシン漁のほか様々な産業で成功をおさめた者も多かった。賀露神社の鳥居脇の石灯籠にも、北海道枝幸郡浜頓別町への移住者の子孫が寄贈した旨の記載がみられる。また、賀露に近い鳥取市晩稲の波津神社の旧石鳥居も、北海道移住者からの寄附によるものである。故郷を思い、故郷に錦を飾ろうとする成功者・開拓者たちの誇りが感じられる。



【北海道利尻島の利尻山神社に残る賀露からの移住者が奉納した燈籠】

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

（1）空間構成

① 因幡八景

『東海道五十三次』で有名な浮世絵師の初代歌川広重の晩年の作『六十余州名所図絵』（1853 年成立）には因幡国を題材にした浮世絵として「因幡 加路・小山」の 1 枚がおさめられている。そこに描かれた風景は、右手に賀露村、左手に湖山池を配置し、南側の丘陵から鳥瞰的に眺めた構図となっている。近年の研究では、この「因幡 加路・小山」は、広重がこの景色を実際に見て描いたのではなく、17 世紀初頭に成立した『山水奇観』をモチーフとしており、『山水奇観』は江戸時代初期に成立したとされる『因幡民談記』中の「加路小山図」をモデルにした可能性が高いことが指摘されている。

『因幡民談記』の絵図には賀露明神・番所・茶屋・東善寺のほか多数の家々が描かれているが、広重の作品には建



【初代歌川広重作による「因幡加路・小山」の図】（鳥取市歴史博物館蔵）

物類は省略され、「明神山」が残るのみである。しかし、いくつかのモチーフがあるにせよ、日本を代表する浮世絵師である初代広重が因幡を代表する名所としてこの地を選んだことは重要であり、江戸時代における賀露周辺が因幡地方の中でも特に代表的な景観であったことを物語っている。

②町並みの形成－貝殻屋敷－

明治～大正期における賀露の町は、賀露神社の鎮座する丘陵の真下にイトバ（為登場）があり、船着き場として人や荷物の積みおろしをしていた。

大正末から昭和初めにかけてイタヤ貝が豊漁となると、丘陵北側に大量の貝殻が捨てられるようになった。この大量の貝殻はやがて埋め立てられ、その上には屋敷が建てられた。このようにして造られた地盤の上に建つ旧道の東側の屋敷地は今も「貝殻屋敷」と呼ばれている。貝殻屋敷の地盤は弱く、しばしば地盤沈下がみられたため、家を持ち上げて地盤を固める工事が行われた。

その後も漁業の発達や道路の建設など重要港湾としての整備とともに戸数は増え、丘陵下から海側にかけて家々がひしめき合うように軒を連ねて、現在の町景観が形成されていた。俗に「賀露千軒」と呼ばれる。このように、住宅が密集し、坂道が多くかつ道幅は狭いというところに賀露の町並みの特徴がある。



【賀露神社下のイトバ付近からみた大正～昭和初期頃の賀露の様子】



【現在の賀露の町並み。右手は貝殻屋敷に続く家々。その背後には沿岸道路がついている】

（２）人的構成－名字－

賀露港の沿岸部には「網」「砂」「浜」など漁業や地形に関係する名字が多い。例えば「網」のつく名字は網田・網浜・網本・網尾・網師（あじ）・網師本などがあり、「砂」や「浜」のつく名字として砂沢・砂口・浜本・浜口などが多くみられる。これらは、地引き網や刺し網という網漁が盛んだったことや砂浜地形が広がっていたことに由来するといわれる。

さらに、この地方には江戸から明治にかけて、島根県地方や若狭地方から出稼ぎに来る人も多かった。彼らの中にはやがて賀露の地に移住した人もいたとされる。出雲谷や敦賀といった名字はその名残であろうか。

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

（1）吉備真備杯奉納囲碁大会

『吉備大臣入唐絵巻』（ボストン美術館所蔵）には、遣唐使の吉備真備が在唐中に幽閉され、幽霊となった安倍仲麻呂に導かれて、皇帝による『文選』や囲碁による無理難題を解いて、遂に帰国を達成する、という話が記されている。このような伝説をもとに、学問や文化、囲碁を日本に持ち帰った吉備真備の功績をたたえ、また地域おこしにもつなげようと、吉備真備杯実行委員会（松本信光委員長）が中心となって、平成20年4月6日に第1回「吉備真備杯奉納囲碁2008」が開催された。当日は日本棋院の山田至宝6段、関西棋院の本多悟郎8段を招き、鳥取県内各地の囲碁グループによる団体戦のほか、小中学生40人による個人戦が行われ、終日、囲碁愛好家による熱戦が繰り広げられた。



【昭和初期頃の囲碁大会の様子】（かつてはこのような囲碁大会が開催されていた。）



【第1回「吉備真備杯奉納囲碁2008」で熱戦を繰り広げる参加者たち】（平成20年4月6日）

[参考文献]

- ・近藤喜博「賀露神社の宮銭」（同氏著『日本の神—神道神学のために—』1968年）
- ・伊藤康「二人の蘭人工師と賀露港の改修—鳥取県の水災史・序説—」
（『鳥取県立公文書館紀要』第3号 2007年）
- ・野地恒有「因幡賀露浦、出船入船御繁昌の港—旅漁民と〈港の文化〉—」
（『郷土と博物館』鳥取県立博物館 1991年）
- ・中山明慶「賀露の『船下し唄』について」
（『鳥取大学教育学部研究報告人文・社会科学』第40巻第2号 1989年）
- ・中山明慶「貝殻節考」（『鳥取大学教育学部研究報告人文・社会科学』第35巻 1984年）
- ・伊藤康晴「名所図会の図像変遷について—描かれた因幡国加路・小山—」
（『鳥取地域史研究』第3号 2001年）
- ・『但馬・廻船史話』（安本恭二著 2002年）
- ・『鳥取県史 2 中世』（鳥取県 1973年）
- ・『鳥取県史 3 近世 政治』（鳥取県 1979年）
- ・『鳥取県史 5 近世 文化産業』（鳥取県 1982年）
- ・『千代川史』（建設省中国地方建設局鳥取工事事務所 1978年）
- ・『かろ広報』（賀露地区公民館発行）
- ・『鳥取県史ブックレット1 織田 vs 毛利—鳥取をめぐる攻防—』（鳥取県 2007年）